

Frank O'Hara, "Poem Read at Joan Mitchell's" における 共同体の表象

松 坂 朱 莉

はじめに

1950年代前半、Paul Goodmanの“Advance-guard Writing in America: 1900-1950”を読み、現代の前衛作家たちは共同体を築くために「彼らのために、彼らについて、個人的に書く（“to write for them about them personally”）」(211) べきだというアイディアに感銘を受けた Frank O'Hara の作品群には、“John Button Birthday”や“Adieu to Norman, Bon Jour to Joan and Jean-Paul”など、誕生日や門出などの友人たちの転機に寄せた機会詩（occasional poem）が多く見られる。O'Haraによる1957年の詩“Poem Read at Joan Mitchell's”もまた、画家の友人 Jane Freilicher と Joe Hazen との結婚を祝うために書かれた機会詩である。Freilicher は、O'Hara が築いた多様な人間関係の中でも特に親密な友人であったことが伝記的事実からも明らかである。1950年のクリスマスのパーティーで出会って間もなく O'Hara と意気投合し、親密な関係になった Freilicher は、当時の関係について、“It was a bond such as I never had with anyone else. It was instant intimacy” (Gooch 178) と語っている。Freilicher の魅力に心を奪われていた当時の O'Hara の作品には、彼女が何度も登場しており、まさに O'Hara にとってのミューズの存在であったのだ (Gooch 178)。しかし、本稿で取り上げる“Poem Read at Joan Mitchell's”を読んだ Freilicher は、“The Poem was very nice, but somehow I felt there was a certain resignation in the tone” (Gooch 293) と述懐している。親しい友人の晴れ

の日を祝福する詩に漂うこの諦念 (“resignation”) の気配は、いったい何に向けられたものなのだろうか。

従来、本作を扱った論考の多くは、同性愛者の O'Hara と、異性愛者であり結婚を控えた Freilicher との間の隔たりや離別を読み取るものであった。代表的な例として、Alan Feldman は、この詩の着想源である Guillaume Apollinaire の “Poem Lu Au Mariage d'André Salmon” と本作を比較し、異性愛者である Apollinaire による前者が結婚と愛を詩の主題とするのに対し、本作に表れる O'Hara の心情については、“He is worried, clearly, about the effect this marriage may have on his close, longstanding friendship with Jane Freilicher” (124) と論じている。また Andrew Epstein は、友人の結婚という出来事に対する O'Hara の複雑な感情、そして前衛芸術家かつ同性愛者としての、制度化された異性愛的結婚という観念そのものへの違和感に起因する喪失感が、O'Hara の詩に底流していると主張する (109)。結婚する友人を前にした O'Hara の感情を、成就し得ぬ欲望や喪失感と読み込む解釈は、詩の語り手が結婚という制度の外部にいることを読者に想起させるが、むしろ O'Hara の詩は、そうした制度から距離を取りながら、独自の共同性を描こうとする試みとして再読可能ではないだろうか。そこで本稿では、従来の読解に批判的視座を保ちつつ、本作を、異性愛的家族像に収斂しない新たな共同体の可能性を描く機会詩として読解することを試みる。

第1節では、冷戦下における同性愛者への抑圧的状况を概観した後、Kath Weston の *Families We Choose: Lesbians, Gays, Kinship* (1991) における、同性愛者による血縁関係や婚姻関係に限定されないオルタナティブな家族の在り方を意味する「選ばれた家族 (“chosen families”)」の概念を参照し (Weston 27)、O'Hara の詩に描かれるオルタナティブな共同体の可能性を検討する。さらに、O'Hara が Goodman から受けた影響の一つである仲間の名前の頻出が、前衛芸術家としての連帯やゲイ・コミュニティ固有の言語使用と結びつき、制度的婚姻に対抗する流動的な共同

体像を提示していることを明らかにする。第2節では、本詩に見られる流動性と即興性に注目する。結婚のような制度的拘束に対して懐疑的な姿勢をとる O'Hara は、選ばれた家族の理念に見られるような流動的な関係性を部分的に志向していた。このような O'Hara の人間関係に関する思想の一端は、O'Hara の詩の言語使用に表れていると考えられる。そこで第2節では、O'Hara の詩における即興性のレトリックを分析し、人間関係の持続不可能性に痛みを覚えつつも、流動的な共同体の感覚を詩の中に再現する詩人像を提示する。第3節では、前節で論じた O'Hara が詩の中で表現する関係の流動性や儚さから立ち現れる偶発的な共同性を、主に Giorgio Agamben による『到来する共同体』の中で展開される理論的枠組みを用いて読み解く。具体的には、Agamben が説く「なんであれかまわない存在」や「非の潜勢力」という概念に依拠しながら、O'Hara の詩に描かれる共同体を、共通の属性や理念を前提としない、偶発的かつ生成的なものとして解釈する。尚、本稿で参照する選ばれた家族の概念や Agamben の共同体論は、O'Hara の時代とは歴史的文脈を異にする。そこで本稿はこれらを直ちに結びつけるのではなく、相互の差異を踏まえつつ、制度や同質性に収斂しない共同性という共通の問題系を照射するための補助的な参照枠として用いる。以上を通じて、本稿は“Poem Read at Joan Mitchell's”を、友人の結婚を祝福する一篇にとどまらず、持続し得ぬ関係の儚さに対する葛藤を抱えながらも、新たな共同性の可能性を生成し続ける O'Hara の詩的営為の証として再解釈することを目指す。

1. 選ばれた家族と前衛芸術家の共同体

Weston が複数の同性愛者たちへの聞き取りを通じて、選ばれた家族という新しい共同体観の調査と定義づけを行った時代背景には、1980年代からの AIDS の流行があった。1983年発行の Moral Majority Report の“Homosexual Diseases Threaten American Families” (Weston 23) という

見出しからは、当時同性愛者が置かれていた危機的な状況を端的に読み取ることが出来る。さらに、Simon Watney は AIDS をめぐる扇動的な報道が、同性愛者の生活と異性愛者の家庭の間の断絶を決定的に深めたと指摘している (102)。このように、AIDS 流行期における同性愛者を病理化する言説やメディア報道によって、同性愛者の家庭からの周縁化が進んだのであった。一方、AIDS 流行から遡り、O'Hara が生きていた冷戦期においても、同性愛者は危機的な状況に置かれていた。David K. Johnson は、1950 年 2 月、国会の委員会で当時の国務次官候補代理 John Peurifoy が、安全保障上のリスクと見なされた職員の解雇を報告し、その中に 91 人の同性愛者が含まれていたことを明らかにしたと述べている。多くの人々はこの発言を、国務省、ひいては政府全体が性的倒錯者に侵略されている証拠と解釈し、国中に不安と怒りが巻き起こった。このような状況下で、数千人に及ぶ政府職員が職を追われ、多くの政治家やジャーナリスト、国民たちは、同性愛者を共産主義者以上に国防を脅かす存在として位置づけたという (1-2)。したがって、AIDS パンデミック下の 1980 年代と、O'Hara たちが生きた冷戦期の双方において、多くの同性愛者は、結束し危機を乗り越えることを求められたと考えられる。

Weston は、血縁や婚姻関係のない他者との間の親密な結びつきを制度の代わりに裏付けるものは、“offers of assistance, commitment to ‘working through’ conflicts, and a common history measured by months or years” (113) であると主張する。選ばれた家族内での相互扶助は、感情的な支え合いにとどまらず、病気の際の看病や、パンクしたタイヤの修理、空港への送迎といった実務的な援助にまで及ぶという (113)。前述の 1980 年代と 50 年代の状況的類似を踏まえて O'Hara の詩を読み直すと、「いつか偶然今よりも稼げるようになるだろうから、もし二人の間に子供ができたなら、“godfather” になりたい (“I should probably propose myself as a godfather if you have any / children, since I will probably earn more money some

day / accidentally”）」(266) と述べる詩行は、選ばれた家族の一員としての支援の申し出、あるいは友人夫婦の生活に積極的に関与しようとする意志の表明と解釈出来る。さらに、“the Sagamore’s terrific ‘coffee and, Andy,’ meaning ‘with a cheese / Danish’ — / did you spit on your index fingers and rub the CEDAR’s neon circle for / luck?” (265) のような、O’Hara と Freilicher らに通じる合言葉や合図が散りばめられた思い出の列挙は、まさに選ばれた家族の共通の歴史の構築にほかならない。これらの列挙からは、これまで築いてきた友情を基盤とし、これまで以上に親密な関係を継続することを、O’Hara が Freilicher らに約束していると解釈することが出来る。他方で、選ばれた家族という言葉が表す共同体の在り方は、婚姻や血縁関係といった既存の社会秩序への挑戦でもある。Lytle Shaw が “the poem poses this shared past against its possible obliteration at the hands of Freilicher’s ‘peculiar desire to get married’” (54) と指摘するように、O’Hara による共通の記憶のカタログ化は、Freilicher の「奇妙な (“peculiar”)」結婚願望に対する批判的応答としても読みとれる。選ばれた家族の概念が登場する 1980 年代以降の文脈とは異なるものの、詩の中で共通の思い出の列挙を通じて表される関係性は、選ばれた家族の根底にある、異性愛者が築く血縁関係に基づく家族に対抗する理念が通底しており、O’Hara と Freilicher を結びつける要素は、制度ではなく、記憶と関係性の積み重ねにあると考えられる。

当時 O’Hara が直面していた疎外感や危機感は、冷戦下の同性愛者としてのものだけではない。Goodman は “Advance-guard writing in America: 1900-1950” において、第二次世界大戦後のアメリカ社会は、人々が順応や安全にしがみつき、不安に直面するとすぐにパニックに陥る “shell-shock” の状態だったと主張する。例として、Goodman は 1948 年に退役軍人の観衆に向けて行ったカフカについての講義を挙げる。この時、観衆たちは、カフカを現実の生活とは関係のない精神病的なビジョンを持つ異常者と見なしたという。このような創造力が観衆に受け入れられな

い時代において、深い源泉から芸術が生まれることはほとんど期待出来ない、当時のアメリカの芸術分野が陥っていた危機的な状況に警鐘を鳴らした。さらに Goodman は、アメリカの芸術の不毛の時代を打開する道は、過去の慣習を打ち壊す力を持つ、前衛芸術の破壊的エネルギーにあり、前衛芸術家たちの連帯が不可欠であると強調した (205-206)。前述の共通の思い出を列挙する手法は、Goodman が言うところの、結婚や祭礼といった特定の機会を祝福するために「仲間のために仲間のことをかく」機会詩の発想とも響き合う (211-212)。このような仲間との交流の中で詩を生み出す O'Hara の手法から、先行研究の中でも O'Hara はしばしば“coterie figure” (Perloff xi) と見なされてきた。Geoff Ward は、人物名を引用する“name dropping”を O'Hara の詩における共同体形成の重要な仕草の一つとして取り上げる (61)。本詩においても“Joe”や“Jane”、“John”、“Janice”、“Kenneth”などの実在の O'Hara の友人の名が用いられていることから、この詩も例に漏れず共同体を形成するための“côterie practices” (61) の一端を担っていると言える。Bruce Boone もまた、O'Hara が詩の中で共同体の仲間の名前を挙げることによる効果について、Allen Ginsberg の“Chances ‘R’”と O'Hara の“At the Old Place”を比較しながら論じる。Ginsberg が仲間を“fairy boys”や“gay sisters”等と描写するのに対し、O'Hara は“Joe, Button, Ashes, Dick”と実名を挙げ、日常の出来事を描いていることを Boone は指摘する。Boone は、両者における仲間の呼称の方法の相違点からは、Ginsberg が共同体の外部に立つ観察者として振る舞うのに対し、O'Hara は共同体の内部に自身を位置付けていることが読み取れるというのである。こうした O'Hara の言語実践は、共同体の仲間へ共通の物語を想起させる、共同体のコードとして機能する。冷戦期に水面下で結束していたゲイ・コミュニティの言語を、Boone は“Gay Language”と呼ぶ (84-86)。前衛芸術家としての共同体形成のための仲間の実名を列挙する手法は、同時代の“gay language”と目的を共有していると考えられる。したがってこの詩は、一義的には

Hazen と Freilicher の結婚を祝う祝婚歌の体裁を取りながら、選ばれた家族のような異性愛規範的な結婚制度に抗う共同体像を提示するとともに、前衛芸術家としての連帯を強める機会詩とも見なし得るだろう。

Hazel Smith もまた、O'Hara が詩作において大いに Goodman の影響を受けていることを指摘する。Smith によれば、O'Hara が自身の詩を友人に送ったり、友人を詩の題材にしたりする習慣は、自身の“reading community”を作るための実践であったという。さらに Smith は、友人の存在が詩を書くための契機となる O'Hara の詩の中では、テキストと現実が交差し、その結果として詩が友人関係を形成することもあれば、逆に関係を壊すこともあると論じる。その際に、Smith は Bill Berkson の“you can't maintain a friendship with someone whose work you don't admire. . . you don't just like someone's work because they are a friend of yours, those friendships broke up on aesthetic grounds” (Berkson qtd. in Smith 76–78) という言葉を引く。Smith が指摘するような友人間の美学的な齟齬は、次に引用する O'Hara の Freilicher の結婚に対する反応を表す形容詞の羅列から読み取ることが出来る。

It's so

original, hydrogenic, anthropomorphic, fiscal, post-anti-esthetic,

bland, unpicturesque and WilliamCarlosWilliamsian! (265)

詩行の中に含まれる“original”、“post-anti-esthetic”、“unpicturesque”、“WilliamCarlosWilliamsian”という語は、O'Hara の前衛芸術家としての姿勢を考慮すれば、概ね肯定的な意味を含む語と考えられる。しかしその間に差し込まれる“fiscal”や、個性がなく風味に乏しい様を意味する“bland”という語彙によって、他の語にも、むしろ制度的な結婚を選んだ友人に対する皮肉や当てこすりのニュアンスを帯びさせている。Smith は、互いの作品を尊重できるかどうかのみを指針とする美学的な

結びつきを、「脆くも、変化に開かれている」(78)と特徴づける。Freilicherが体制に従い、O'Haraの芸術に対する前衛的姿勢と一致しなくなっていたとすれば、彼女は共同体から淘汰されつつあるように見える。しかし同時に、両者の結びつきの不確かさが、新たな関係を生み出す可能性を内包しているとも見なし得る。不安定さ故に変化に開かれた両義的な結びつきのあり方は、O'Haraの人間関係を特徴づける流動性を示すものであり、次節で論じるO'Haraの流動性の詩学への足掛かりとなる。

2. Frank O'Haraの流動性と即興性の詩学

O'Haraを「生の活力を凍りつかせ、殺してしまうことを恐れる(“he worries about freezing and killing life's vitality”）」(126)詩人と見なすEpsteinは、永遠の結びつきを選ぶ代わりに「新しくあろうとする努力(“effort to be new”）」と「他者であろうとする努力(“effort to be other”）」(O'Hara 265)といった困難で前衛的な営みを手放す準備が出来ているように見えるFreilicherに対し、O'Haraが、結婚という束縛の中で、人はなお新しくあり続けることが出来るのか、という猜疑心を抱いていると指摘する(111)。Epsteinの読みを踏まえれば、O'Haraの結婚への疑念は、制度や他者に縛られることへの不安に根ざしていると解釈できる。これに対し選ばれた家族の理念は、制度的婚姻の固定性とは異なり、常に変化しつづける流動的な関係性を示す。Westonは選ばれた家族を、カップルや集団といった固定的な所属単位としてではなく、個人を中心とした関係のネットワークとして捉え、その構造には高い流動性があると論じている。その成員には友人、恋人、子ども、さらには過去の恋人までもが含まれ得る。こうしたメンバーの増減や関係の変化に一定のパターンが存在しない関係性は、再現不可能で非定型的なものであるという(108-111)。Westonが描き出すような流動性は、O'Haraの詩の中で、言語的な次元においても具体化されている。詩に表れる時

制の揺らぎや、即興性の演出、あるいは語りのモードの転換といった要素は、詩のテキスト空間そのものを開かれた場として形成すると考えられる。そこで本節では、本詩のテキストのレベルでの流動性に注目し、詩の言葉に表れる O'Hara の共同体感覚を読み解くことを試みる。

パーティーを盛り上げるための“bugle”として O'Hara が読むこの詩は、“tonight”や“future”、あるいは、“It's the day before February 17th / it is not snowing yet but it is dark and may snow yet” (265-266) のように、時間の流れを喚起する語や詩行が効果的に用いられている。また、詩の中の現在形と過去形の混在は、詩の語りを出来事として現前させる効果を生む。語り手が観客と会の主役である Freilicher と Hazen に語り掛ける時は現在形 (“so I am here reading poetry anyway / and no one will be bored tonight by me because you're here”) (265)、過去の出来事を列挙する際には過去形が用いられている。このこと自体は自然な話法であるが、詩の中に置かれることで、この時制の変化は特別な効果を帯びる。すなわち、語り手が現在形と過去形を行き来することによって、語り手の回想は単なる過去の出来事の列挙にとどまらず、あたかも現在進行中の出来事として、語りの現前性と共に読者に提示されるのである。パーティー会場で直接語りを聞いているかのような臨場感が読者に喚起され、それによって語りの即興性が強調されると言える。また Smith は、コネチカット大学ストーズ校に所蔵されている O'Hara の原稿群の中に、全く訂正を加えられていない詩が複数存在することを根拠に、O'Hara の創作プロセスにおける即興性を指摘する。Smith が列挙する詩のリストの中には、“Poem Read at Joan Mitchell's” も含まれている (160)。原稿に訂正がないことは、この詩自体が即興的に作られた可能性を示唆するが、Smith はさらに言語のレベルにも即興性が表れる可能性を見出している。Smith によれば、「連想と換喩のプロセス (“associative/metonymic process”)」が詩の即興性を高めるというのである。Smith は、言葉が連想を促し、その連想がさらに別のイメージへと移っていく換喩的な思考の

プロセスが、詩の即興性を高めると論じる(164)。この詩における、“and now there is a Glazunov symphony on the radio and I think of our / friends who are not here,” (265) という詩行では、ラジオから流れる音楽が滑らかにパーティーの場に不在の友人たちの追想へと繋がり、思考の連想のプロセスが詩行の展開そのものに表れていることが分かる。また、自然現象ではなく、“Maria Tallchief”の衣装の“rhinestones”のきらめきや、バーで吠える小さな犬(“perky little dog barking in a bar”)などに春の兆し(“signs of spring”)を見出す描写(266)は、都市の断片的なイメージに自然との近接点を読み取る換喩的效果と読解する事が可能だが、この換喩表現も、即興的な思考方法の再現と考えられる。このように、言葉が横滑りながら展開していく瞬間的な思考の流れを辿るような O’Hara の詩作には即興性が表れており、彼は詩の中で再現不可能な瞬間そのものを、言葉によって実演していると考えられる。

さらに、詩の中盤に見られる “This poem goes on too long because our friendship has been long” (266) といった、自己言及的な発話は、祝辞というモードの一時的な脱線として機能している。この脱線は、詩に偶発性を付与するとともに、テキスト空間をいっそう開かれたものになっている。John Melillo は、*The Poetics of Noise from Dada to Punk* において、ライブパフォーマンス中に生じるアクシデントがその場に及ぼす影響について論じ、エレクトリックギターの伴奏つきで行われた Patti Smith のポエトリリーディングを例に挙げている。Melillo によれば、Smith が一つの詩のリーディングを締めくくった際、エレキギターの演奏者の Lenny Kaye が即興で反復的なブルースリフを続けたため、Smith は詩の終わりを宣言せざるを得ず、その様子を見た観客の間に笑いが起こり、リズムが突然に途切れたという(148)。Melillo は、その無計画に起こった出来事を、ライブパフォーマンスにおける「ノイズ」として捉え、パフォーマンスの「崩壊の瞬間は、素人っぽさ、即興性、予期しない実験性を露わにする。それによって、(演者が)演奏された曲の形式から、

それぞれが演じるべき台詞を持つ他者と共に一つの部屋の中にいる身体という事実へと突然『堕ちる』ことが示唆される」と述べている(148)。すなわち、パフォーマンス中の予期せぬアクシデントは、ライブパフォーマンスの形式を崩壊させると同時に、演者と観客の間の境界線を攪乱し、両者の新たなつながりを生み出す力を持つと論じられているのである。

本詩における祝辞のモードからの一時的な逸脱もまた、Melillo のいう「ノイズ」と類似した効果を持つ。機会詩としての本来の目的は友人の結婚を祝うことであるが、不意に挿入された O'Hara の個人的感情は、祝辞のモードに一時的な揺らぎを生じさせ、本筋が偶発的に阻害される。この脱線は、Melillo が定義する「ノイズ」の等価物と見なし得るだろう。もっとも、O'Hara の詩が書かれたテキストである一方で、Melillo が説明する Patti Smith の事例は身体の前において生じた出来事であり、両者を直ちに結びつけることは難しい。しかし、前述の O'Hara の詩の中の時制の混在や語りの脱線は、書かれたテキストに語りの前性を付与し、読者にあたかもその場に居合わせているかのような臨場感を喚起すると見なし得る。このような O'Hara のパフォーマンス的な詩の語りにおいて、O'Hara の脱線は Smith の「ノイズ」と等価の効果を発揮すると考えられる。パフォーマンス中の予期せぬアクシデントが形式を崩壊させたように、この詩における語りの逸脱もまた、テキストの秩序に揺らぎをもたらす。その揺らぎは、詩が即興的に紡がれているかのような前性と共に読者を語りの場に引き込み、作者との一時的な共在感覚を生じさせる。こうして作者と読者の間の境界は一瞬揺らぎ、両者は同じ空間と出来事に参与しているかのような感覚を共有するのである。その意味合いにおいて、O'Hara の詩に見られる語りの脱線は、Smith の「ノイズ」と同様に、即興性や偶発性を通じて、流動的な共同体の感覚を生成する契機であると解釈できる。こうした逸脱に特徴づけられた O'Hara の詩は、仲間たちにとどまらず読者までも巻き込み、一

時的でありながら開かれた流動的な共同性を提示しているのである。

本稿はここまで“Poem Read at Joan Mitchell’s”に見られる、テキストのレベルでの流動性に注目してきた。流動性は、時間の流れを意識させる時制の操作、連想や換喩の表現、さらには偶発的なアクシデントを思わせる自己言及的な発話として表れ、これらはいずれも詩の即興性を高める要素となっている。このような言語使用の効果によって、本詩は紙面上に記された言葉でありながら、発話の場で即興的に生成された詩としても読める可能性が生まれる。即興的な詩の言葉は、作者と読者、また詩の中に登場する人物たちとの関係を固定化されたものから解き放ち、その都度立ち現れる関係性へと変容させる。しかし、1980年代から90年代にかけてのAIDS危機下において、選ばれた家族を形成した人々が、その流動性の中に、主体的な選択の持つ創造性というポジティブな力を見出していたのに対し（Weston 109）、1950年代の芸術家コミュニティに身を置いたO’Haraの流動的な人間関係に対する態度は、むしろ永続不可能性への諦念や不安を含んだ複雑なものとして捉えられてきた。Epsteinは、詩の中盤に表れる“*This poem goes on too long because our friendship has been long, long / for this life and these times, long as art is long and un- / interruptable, / and I would make it as long as I hope our friendship lasts if I could / make poems that long*”（266）という一節について、「この愛情に満ちた言葉の背後には、詩も友情も無期限に続けることは不可能だという潜在的な認識が潜んでいる」（114）と論じ、O’Haraの詩に通底する人間関係やある瞬間が永続し得ないことに対する諦念を指摘している。さらに、Wardが言うところの“*humanist refuge against temporality*”（61）として共同体を捉えるO’Haraの感性は、“*let’s advance and change everything*”という前衛芸術家的な宣言の直後に置かれた“*but leave these little oases in / case the heart gets thirsty en route*”（266）という一文に端的に表れている。この詩行からは、流動的な共同体の詩人でありながら、同時に持続し得ないつながりの儚さに痛みを覚え、それを詩

のうちに保持しようとする O'Hara の姿が浮かび上がる。

3. 「なんであれかまわない存在」

Terence Diggory は、New York School の詩人たちの共同体性について論じる中で、多くの先行研究と同様に、O'Hara の Goodman からの影響を指摘した上で、Jean-Luc Nancy の “inoperative community” の概念を用いることで、Goodman の影響の先へと議論を展開しようとしている。Diggory は、O'Hara が “It does not have to do with personality or intimacy, far from it!” (498) と断言する疑似詩論 “Personism: A Manifest” の中に、両者の共通項を見出す契機があると主張する。特に、“It puts the poem squarely between the poet and the person, Lucky Pierre style, and the poem is correspondingly gratified” (499) という記述は、Nancy が言うところの “the *between as such*” (29) と響き合うと論じる。詩人と他者の間に置かれる詩は、両者を孤立した存在として互いに曝け出し合う空間として機能すると Diggory は言う。さらに Diggory は、Nancy が言うところの人々を一つの存在へとまとめ上げる伝統的な物語である “myth” と対照的な、O'Hara と Nancy に共通する新しい共同体観を生み出す新しいエクリチュールに “Personism” がなり得ると述べる。Diggory は Nancy が提唱する新しいエクリチュールが “literature” であることを示した上で (25)、次のように続ける。“It inscribes us as exposed to one another and to our respective deaths in which we reach one another — in passing to the limit — mutually” (66)。つまり、Nancy において共同体とは、私たちが互いに、そしてそれぞれの死に曝されることによって成立し、その限界においてのみ相互に触れ合い、到達し合うことができる関係である (Diggory 25-26)。このように Diggory は、O'Hara の疑似詩論から読み取ることが出来る O'Hara の共同体観を、Nancy を引きながら有限性の共有に基づくものとして解釈している。こうした視点と並行して、前節でみたように、連想や換喩を用いた即興的な詩を作成するプロセスの再現や時制の

混在は、むしろ止まることのない時間の流れや関係の流動性を読者に意識させる。こうした特徴によって、O'Hara の詩の空間は、絶えず出来事が生成され続ける場として開かれ、また読者自身も、想像上で一時的に共同体に参入できるような場となっている。したがって、この詩において共同体は、有限性と流動性が緊張関係をなす中で、絶えざる生成と変化の過程として表れていると解釈し得る。

Diggory が Nancy の理論的枠組みを用いて O'Hara の共同体観の解釈を試みているのに対し、Shaw は、O'Hara の詩学と作品に通底する共同体的感覚を論じる中で、必ずしも構成員が均質な意見や認識を共有しない共同体のあり方を説明する理論的枠組みの一例として、Nancy と同時代の Giorgio Agamben の『到来する共同体』を挙げている。Shaw は、「Agamben の著作は、共同体を偶発的な結びつきに基づき、たえず解体と再編成を繰り返す、一時的かつ便宜的な社会的集団として捉える発想に焦点を当てるのに役立っている」(8) と述べている。Shaw が指摘するような Agamben の共同体像の一時性や偶発性は、第 1 節の中で論じた O'Hara を中心とする美学的繋がりを基盤とした、脆くも変化に開かれた共同体像と結びつく。一般に共同体について語られる際は、その成員の間に共通する性質やイデオロギーが前提とされるが、Agamben が描く共同体は、「赤いもの、フランス人、ムスリム」などといった、属性や集団に帰属しない、あらゆる特性から解き放たれた「なんであれかまわない存在」によって形成される (9-10)。この一つの理念や属性に縛られない存在の在り方は、O'Hara が “Personism: A Manifest” において “They’re just ideas” (498) と述べ、本詩では “we don’t really love ideas, do we?” (265) と問いかける姿勢と共鳴している。O'Hara にとっての共同体とは、理念を共有することではなく、偶発的な出来事や関係を通じて生成される場と考えられる。つまり、Agamben が構想した属性に依拠しない共同体を、O'Hara は詩の中で具体化していると言える。パーティーに不在の友人たちに言及する次の詩行からも、その一端が見て取れ

る。

... I think of our
friends who are not here, of John and the nuptial quality
of his verses (he is always marrying the whole world) and
Janice and Kenneth, smiling and laughing, respectively (they
are probably laughing at the Leaning Tower right now)
but we are all here and have their proxy
if Kenneth were writing this he would point out how art has changed
women and women have changed art and men, but men haven't
changed women much (266)

この詩行に登場するのは、O'Hara と同じく New York School の詩人である John Ashbery と Kenneth Koch、その妻 Janice である。O'Hara は彼らの名前を呼び出しつつ、自身の詩のスタイルとの差異を例示することで、New York School の詩人たちの単一の理念やスタイルに収斂しない多声的な共同体を詩の中に再現している。一方で、“we are all here and have their proxy” という詩行は、その場に不在のメンバーを、共同体内で代替可能な存在として描いているようにも解釈できる。ここで想起されるのは、Agamben の『到来する共同体』における議論である。Agamben は人間の「顔」を例に挙げながら、個別的なものと一般的なもの是对立せずに両者の間を行き来すると論じている（『到来する共同体』30-32）。顔は、共通的な顔の型を個人が分有したものでも、個人の特徴を平均化したものでもない。この意味において、顔は共通の性質にも固有の性質にも所属をしていない。しかし表情等の形をとって個人の性質が常に顔という普遍的な場に表れることによって、個別性と共通性は往還するのである。この議論は、顔を New York School や前衛芸術家の共同体と置き換えることも可能であろう。彼らの表現形式は、団体の共通

性に還元されることもなければ、彼らの特異なスタイルを平均化したものが New York School や前衛芸術そのものを表すわけではない。むしろ各人が固有の方法で表現し続ける不断の営みこそが、New York School や前衛芸術家の存在を成り立たせているのである。したがって O'Hara は、友人たちの独自のスタイルを呼び出しつつ、同時に仲間の共通の性質を喚起するように“we are all here”と語ることで、特異性と普遍性が互いに移行し合う共同性の在り方を詩の中で再現していると読み取れる。

岡田温司は、『『なんであれ』人は『あるがままの存在』として、現勢力ではなくて潜勢力を共有している」と論じる(124)。潜勢力とは、「人が何かをなすことがつねにできるとして、その何かをなすかなさないかはそれとは別の問題だという原則」(Murray 91)のことをさすが、もともとはアリストテレスの用語に由来する。Agamben は『思考の潜勢力』の中で、潜勢力を2種類に区別する。1つは、アリストテレスが言うところの、あらゆる物事の現実化する力「現勢力」へと移行できる潜勢力(332)。もう一方は、「現勢力にならない潜勢力」(342)であり、言い換えると「現勢力にならない(mē energein)ことができる(endechetai)」(343)潜勢力である。能力を習得していながら、それを現実化しないことができる潜勢力を、Agamben は「非の潜勢力」(342)と呼ぶ。本稿において筆者は、非の潜勢力を到来する共同体の存在条件と考える。Agamben が『到来する共同体』で挙げる具体例を参照すれば、人がブロンズの髪をしていようと小柄であろうと、優しかろうと足に不自由を抱えていようと、あるいはそうでなくとも、その人はあるがままの特異性において愛される価値を有するとされる(10)。“Poem Read at Joan Mitchell's”において、非の潜勢力は次の詩行に顕著に表れている。

I hope there will be more

more drives to Bear Mountain and searches for hamburgers, more evenings

avoiding the latest Japanese movie and watching Helen Vinson

and Warner Baxter in Vogues of 1938 instead, more discussions
in lobbies of the respective greatnesses of Diana Adams and
Allegra Kent,
more sunburns and more half-mile swims in which Joe beats me as Jane
watches, lotion-covered and sleepy, more arguments over
Faulkner's inferiority to Tolstoy while sand gets into mu
bathing trunks (266)

“I hope there will be more” という詩行から紡ぎ出される未来の予定のリストは、一見すると明るい展望を示すように見えるが、第1節で引いた Freilicher と O'Hara の芸術観の不一致の予兆を踏まえれば、2人が今後多くの時間を共有する可能性は低いと詩人自身も感じ取っていたと解釈できる。これを踏まえると、“more drives”、“more evenings”、“more discussions”といった more によって修飾される語たちからは、未来への期待感と、「もっと」多くの時間を過ごすべきだったという過去への後悔の間で揺れる詩人像が浮かび上がる。しかし、これらの展望の実現が困難である可能性が高いほどに、この詩行は非の潜勢力を帯び始める。つまり、確実に実現する未来のみを列挙するのではなく、これらの予定が実現できない可能性を並置することで、O'Hara と Freilicher の関係は、Agamben の言うところの「絶えず揺れ動く様相の限らない連続」へと開かれるのだ。Agamben は、共同体の成立を一度限りの出来事ではなく、「成長と緩和、自分のものになることと自分のものでなくなること」(『到来する共同体』31)の絶えざる反復として捉えていた。この視点は“You will half the year in a house by the sea and half the year in / a bouse in our arms” (266) という O'Hara の詩行にも通じる。海辺の家 (“a house by the sea”) は Freilicher と Hazen の家庭生活、私達の腕 (“our arms”) は友人サークルを指すと考えると、結婚によって共同体から友人が離脱するのではなく、自分たちの元から友人が離れ、また戻るといった離別と再

開の反復が絶えず続くであろう今後の友人との関係性に、O'Hara は希望を見出していると解釈できる。したがってこの機会詩は、Freilicher と Hazen の結婚という一度限りの点としての出来事だけでなく、流動的だからこそ未来へと持続し得る、線としての関係性をも祝福しているのである。

おわりに

O'Hara が本作の中で再現した共同体は、協力関係や共有した時間を絆の根拠とするという点において、婚姻関係や血縁関係を越えた家族関係である、選ばれた家族の概念と通じ合う部分がある。選ばれた家族が示す、対一の人間関係に強制されない流動的な相互扶助のあり方は、主に家族を形成する同性愛者たちに連帯感と創造的な力を与えた。O'Hara の詩にもその相互扶助の姿勢と流動性が詩の内容にも形式にも表れていたが、同時に過ぎゆく時間や変化し続ける関係性に対する O'Hara の感傷や不安も読み取れる。O'Hara の詩に通底する不定形さや即興的な時間感覚を、一過性のものでなく、持続し得る関係性の契機として読み直すにあたり、Agamben の共同体論は有効である。特に「なんであれかまわない存在」に関する思索は、詩の中に表象される New York School の詩人たちの多様性と共鳴する。さらに、Agamben の議論は、友人同士の関係が固定化されず、場や状況に応じて組み替えられていく O'Hara の詩の身振りを考える際の有効な参照枠となる。だからこそ本詩における離別の予兆を、関係の断絶ではなく、組み換えながら継続する関係性として読み替える視座を、本詩は読者に与える。本稿で試みた、新しい共同体の誕生を祝う機会詩としての“Poem Read at Joan Mitchell's”の再解釈は、制度的な結婚を選んだ異性愛者の友人に複雑な思いを抱く同性愛者のステレオタイプの図式に O'Hara を回収する読みから、読解の射程を拡張するだけでなく、多様なジェンダーやセクシュアリティ、表現スタイルをもつ芸術家たちによって構成された、O'Hara

を中心とするニューヨークのアートサークルの可塑性を再考する手がかりともなり得る。

“[W]e peer into the future and see you happy and hope it is a sign that we / will be happy too, something to cling to, happiness / the least and best of human attainments” (267) と締めくくられるこの詩には、文末にピリオドが置かれられない。それは O'Hara が詩の中において、そして現実においても生成しようとした終わりのない開かれた共同体を喚起する詩的效果の一つといえよう。さらに、最終行において“happy”という語が繰り返されており、O'Hara はその場にいる人々 (“we”) に向けて、幸福な未来を見据え、それにしがみつこうと呼びかけている。ここで想起されるのは、先に検討した共同体の議論である。共同体を成立させる要因について、Nancy はそれぞれの死という限界点を共有することを (66)、Goodman は前衛芸術家としての信念を、Weston は血縁や異性愛的結婚に依拠せず、友情や恋愛、親子関係といった多様な絆を選ばれた家族という概念のもとに束ねる「愛」を強調した。他方で Agamben は、共同体を特定の条件に依拠して定義づけることを避け、代わりに成員があるがままに愛される「なんであれかまわない存在」による共同体像を提示した (『到来する共同体』10-11)。こうした議論を O'Hara の詩を読み直すための重要な参照点とした上で、本詩において O'Hara が共同体の契機として位置付けるものは何か。ここでは、それを“happiness”であると捉えたい。happiness は「偶然」や「運」を意味する hap を語源に持ち、語の根底には不確定性が内包されている。Agamben の「非の潜勢力」は、あることを成し得ると同時に、それを成さないことも可能であるという未定性を含み、静的な状態に留まらない流動性を有するとされている (『思考の潜勢力』346)。「非の潜勢力」と happiness という語の意味に不確定性が通底することを鑑みれば、O'Hara の詩の“happiness”も「非の潜勢力」の代替と捉えなおすことができる。“Poem Read at Joan Mitchell's”からは、この先たとえ結婚をしても、あるいは前衛的な芸術を生み出し

ても、生み出さなくても、ともに時を過ごせても、過ごせなくても、むしろその不確定性ゆえに、愛し合うことが出来る O'Hara と Freilicher らの関係性が読み取れる。O'Hara は、“original”で“new”、そして“vanguard”な共同体の到来を、この詩を通して祝福しているのである。

引用文献

- Boone, Bruce. “Gay Language as Political Praxis: The Poetry of Frank O'Hara.” *Social Text*, no. 1, 1979, pp. 59-92. *JSTOR*, <https://doi.org/10.2307/466406>. Accessed 21 Aug. 2025.
- Diggory, Terence. “Community ‘Intimate’ or ‘Inoperative’: New York School Poets and Politics from Paul Goodman to Jean-Luc Nancy.” *The Scene of My Selves: New Work on New York School Poets*, edited by Terence Diggory and Stephen Paul Miller, National Poetry Foundation, 2001, pp. 13-32.
- Epstein, Andrew. *Beautiful Enemies: Friendship and Postwar American Poetry*. Oxford UP, 2006.
- Feldman, Alan. *Frank O'Hara*. Twayne Publishers, 1979.
- Gooch, Brad. *City Poet: The Life and Times of Frank O'Hara*. Harper Perennial, 2014.
- Goodman, Paul. “Advance-guard writing in America: 1900-1950.” *Utopian Essays and Practical Proposals*. Vintage Books, 1964, pp. 191-216.
- Johnson, David K. *The Lavender Scare: The Cold War Persecution of Gays and Lesbians in the Federal Government*. U of Chicago P, 2006.
- Melillo, John. *The Poetics of Noise from Dada to Punk*. Bloomsbury Academic, 2022.
- Nancy, Jean-Luc. *The Inoperative Community*. Edited by Peter Connor, translated by Peter Connor et al., U of Minnesota P, 1991.
- O'Hara, Frank. *The Collected Poems of Frank O'Hara*. Edited by Donald Allen, U of California P, 1995.
- Shaw, Lytle. *Frank O'Hara: The Poetics of Coterie*. U of Iowa P, 2006.
- Smith, Hazel. *Hyperscapes in the Poetry of Frank O'Hara: Difference, Homosexuality, Topography*. Liverpool UP, 2000.
- Ward, Geoff. *Statutes of Liberty: The New York School of Poets*. Palgrave Macmillan, 2001.
- Watney, Simon. *Policing Desire: Pornography, AIDS and the Media*. U of Minnesota P, 1997.
- Weston, Kath. *Families We Choose: Lesbians, Gays, Kinship*. Columbia UP, 1991.
- アガンベン, ジョルジョ (Agamben, Giorgio). 『到来する共同体』. 上村忠男訳, 月曜社, 2012.
- . 『思考の潜勢力』. 高桑和巳訳, 月曜社, 2009.
- 岡田温司. 『増補 アガンベン読解』. 平凡社, 2021.
- マリー, アレックス (Murray, Alex). 『ジョルジョ・アガンベン』, 高桑和巳訳, 青土社, 2014.